



東南アジア

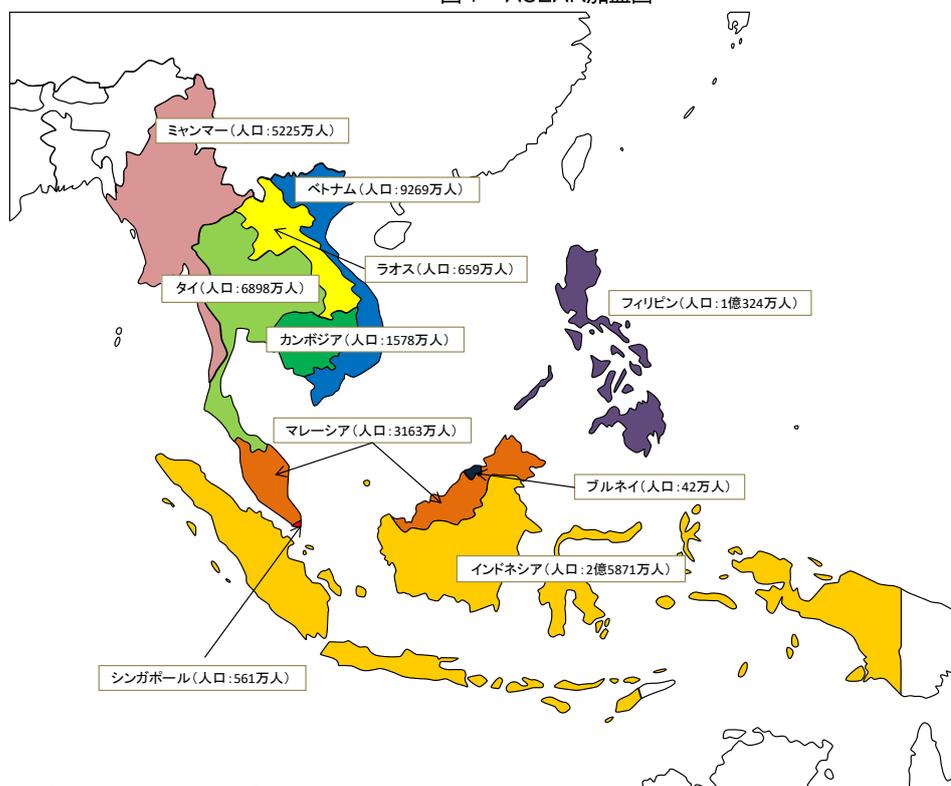
1 農畜産業の概況

アジア開発銀行によると、ASEAN（東南アジア諸国連合）加盟10カ国（図1）のうち、シンガポールとブルネイは、GDPに占める農業の割合が1%以下と低く、経済成長の著しいマレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナムの5カ国（以下「5カ国」という）は、8~18%（2016年）となっており、年々その割合は低下している。5カ国では、都市と農村の経済格差が顕著になっている中で、農村は失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。また、コメなどの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の産出額が増加しないという特徴も有している。上記以外の残り3カ国は、カンボジアが26.3%（2016年、前年比1.9ポイント低下）、ミャンマーが26.7%

（同年、同1.2ポイント低下）、ラオスが19.5%（同年、2014年比5.3ポイント低下）と高くなっている。これらの3カ国は、政情不安が長引いたことなどから農業以外の産業の発展が遅れており、相対的に農業の比重が高い。しかし、政情の安定化に伴う経済の発展により、その割合は低下してきている。

国別には、マレーシアは、油ヤシ、天然ゴムなど永年性作物の栽培が盛んな一方、フィリピンは、トウモロコシ、米などの穀物が中心となっているという特徴がある。畜産業については、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、各国ごとに畜種の重要度が異なっているため、品目ごとの生産量には大きな差がある。

図1 ASEAN加盟国



資料：国際通貨基金（IMF）「World Economic Outlook Database」

注：数値は2016年。

ASEAN各国の主要穀物および畜産物の生産量を見ると、米が多い。また、主要な畜産物は、豚肉および鶏肉であるが、宗教上の理由から豚肉を消費しないイスラム教徒の人口が多いインドネシアやマレーシアなど

では鶏肉が多く、宗教上の制約のないベトナムやフィリピンでは豚肉が多い（表1）。

表1 ASEANの主要穀物および畜産物の生産量（シンガポール、ブルネイを除く）

（単位：千トン）

国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2012	2,599	84	51	218	1,223	644	81
	2013	2,604	86	52	217	1,298	684	83
	2014	1,835	59	53	218	1,416	728	84
	2015	1,756	62	50	219	1,486	793	84
	2016	2,252	65	50	218	1,521	831	52
タイ	2012	38,100	4,948	174	949	1,541	687	1,022
	2013	36,762	4,876	166	967	1,611	697	1,095
	2014	32,620	4,805	162	949	1,757	732	1,067
	2015	27,702	4,730	156	939	1,637	681	1,100
	2016	25,268	4,813	145	945	1,609	680	1,100
インドネシア	2012	69,056	19,387	546	232	1,734	1,140	1,526
	2013	71,280	18,512	543	298	1,838	1,224	1,338
	2014	70,846	19,008	533	302	1,939	1,244	1,410
	2015	75,398	19,612	542	330	2,031	1,373	1,456
	2016	77,298	20,370	561	342	2,111	1,428	1,491
フィリピン	2012	18,033	7,407	295	1,653	1,026	421	18
	2013	18,439	7,377	297	1,681	1,087	428	20
	2014	18,968	7,771	301	1,691	1,115	416	20
	2015	18,150	7,519	305	1,776	1,186	445	14
	2016	17,627	7,219	305	1,790	1,202	450	14
ベトナム	2012	43,738	4,973	382	3,160	526	365	414
	2013	44,039	5,191	371	3,229	576	388	487
	2014	44,974	5,203	379	3,351	633	414	578
	2015	45,105	5,287	385	3,492	701	444	751
	2016	43,437	5,244	395	3,665	741	476	823
ラオス	2012	3,489	1,125	49	61	22	16	50
	2013	3,415	1,214	49	65	24	17	50
	2014	4,002	1,412	50	69	25	17	56
	2015	4,102	1,516	53	73	27	14	57
	2016	4,149	1,552	54	83	27	15	59
カンボジア	2012	9,291	951	73	99	19	19	192
	2013	9,390	927	70	104	18	19	192
	2014	9,324	550	65	112	18	20	195
	2015	9,335	400	65	111	17	13	170
	2016	9,827	351	65	111	18	13	170
ミャンマー	2012	26,217	1,502	318	662	1,143	396	1,809
	2013	26,372	1,601	345	731	1,251	432	1,951
	2014	26,423	1,693	369	821	1,390	472	2,151
	2015	26,210	1,749	402	863	1,505	510	2,361
	2016	25,673	1,831	449	874	1,521	542	2,415

資料：国際連合食糧農業機関の「FAOSTAT」

注1：牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

2：トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

3：過去にさかのぼって数値が変更される場合がある。

2 東南アジア諸国の畜産の動向

(1) 酪農・乳業

ASEAN10カ国では、気候条件が乳用牛の飼養にあまり適さず、良質な飼料の自給が困難で、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではないことから、牛乳・乳製品は、一般的な食材とは言えない。また、流通やインフラの関係から、消費される乳製品は、主に全粉乳などの粉乳類か、缶入り加糖れん乳であった。しかし、近年はコールドチェーンの発達や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳の需要も高まりつつある。

各国とも、脆弱な酪農生産基盤により牛乳・乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、2.6億人の人口を有し、近年、経済発展を遂げているインドネシアについては、乳製品需要の伸びが最も期待されており、ベトナムなどとともに、外資系企業の参入も積極的に行われている。

一方で、ASEAN各国では、乳製品の定義や統計上の取り扱いがあいまいであることから、乳製品需給動向の正確な把握は困難となっている。

① 生乳生産動向

2016年の乳用牛飼養頭数および生乳生産量は、マレーシアの乳用牛飼養頭数は減少したものの、乳製品需要の高まりを背景に増加傾向にある(図2、表2)。

国別にみると、インドネシアでは、乳用牛飼養頭数は53万4000頭(前年比2.9%増)、生乳生産量は91万3000トン(同9.3%増)であった。乳用牛の大部分はジャワ島のジャカルタなどの大消費地に隣接する冷涼な気候の山岳地域で飼養されている。乳用牛の遺伝的能力が低く、零細な経営が多くを占めている。インドネシア政府は、牛肉の国内自給率を90%にするという目標のために、2012年から生体牛および牛肉の輸入規制等を行った結果、国内の牛肉需給がひっ迫し、これを補うために、国内の乳用牛のと畜頭数が増加し、乳用牛が大幅に減少することとなった。2013年下期から、国内牛肉価格で輸入の可否を判断する基準価格方式の

導入などにより、輸入規制が緩和されたことで、2014年以降は、飼養頭数、生乳生産量ともに増加傾向にある。

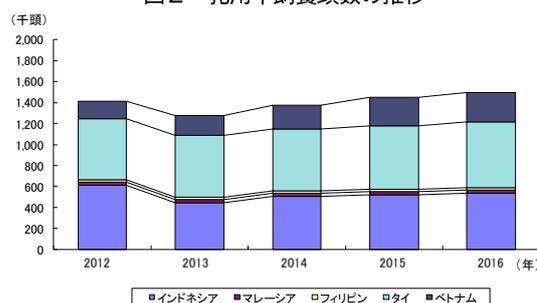
マレーシアでは、乳用牛飼養頭数は3万3500頭(同2.3%減)であった。飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラク州などである。同年の生乳生産量は3万7000トン(同0.5%増)となっている。歴史的に油ヤシや天然ゴムのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料基盤は限定的となっている。

フィリピンでは、乳用牛飼養頭数は2万4500頭(同8.9%増)となっており、そのほか、水牛が乳用として飼養されている。生乳生産量は2万1000トン(同3.9%増)となり、うち約6割が牛由来、残りの4割は水牛乳とヤギ乳とみられている。

タイでは、乳用牛飼養頭数は、62万2900頭(同3.7%増)で、生乳生産量は116万1000トン(同0.3%増)となっている。飼養頭数は、2009年以降、学校給食用をはじめとする飲用乳需要の増加を反映し、増加傾向で推移している。

ベトナムでは、乳用牛飼養頭数は、28万3000頭(同2.8%増)で、生乳生産量は79万5000トン(同10.0%増)となっている。乳用牛の約5割は、主要消費地となるホーチミン市近郊で飼養されている。2001年に政府が酪農振興計画を打ち出して以来、ピナミルク、THミルクなど大手乳業企業による大規模酪農場の開設などを背景に、飼養頭数、生乳生産量ともにここ数年で大きく増加している。

図2 乳用牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

表2 乳用牛飼養頭数と生乳生産動向 (2016年)

国名	飼養頭数	(単位:千頭、千トン)	
		前年比 (増減率)	生乳生産量 前年比 (増減率)
インドネシア	534.0	2.9%	913 9.3%
マレーシア	33.5	▲ 2.3%	37 0.5%
フィリピン	24.5	8.9%	21 3.9%
タイ	622.9	3.7%	1,161 0.3%
ベトナム	283.0	2.8%	795 10.0%

資料：各国政府統計

注1：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

注2：フィリピンの生乳生産量は水牛乳およびヤギ乳を含む。

② 牛乳・乳製品の需給動向

ASEAN諸国では、牛乳・乳製品の消費量に占める輸入量の割合（生乳換算）は一般的に高く、タイを除いて牛乳・乳製品の自給率は低い（表3）。

2016年の牛乳・乳製品の1人当たり消費量を国別にみると、インドネシアは、13.9キログラムとなった。調製粉乳と加糖れん乳の消費が多く、飲用乳の消費は大都市圏に限られ、量は少ない。

マレーシアは、47.5キログラムと、ASEAN諸国の中で最も多い。甘いものを好む習慣があることから、加糖れん乳が多く消費されており、牛乳はフレーバー付きの需要が高い。輸出量は5カ国中最も多いが、これはニュージーランドや豪州から輸入した粉乳を原料として、国内で調製品に加工して再輸出しているためである。

フィリピンは、20.7キログラムとなった。国内で流通する牛乳・乳製品のほぼ全量が、ニュージーランド、米国、豪州などからの輸入乳製品および輸入品を原料とした加工品となっている。

タイは、33.3キログラムとなったが、デンマーク政府の協力により設立されたタイ酪農振興機構や外資系企業による牛乳・乳製品の生産拡大および学乳需要などにより、消費量は増加傾向で推移している。なお、同年の牛乳・乳製品の輸出量は34万7000トンとなっている。これは、豪州などから輸入した脱脂粉乳などを原料として、還元乳やれん乳などへ加工の上、周辺国などに輸出しているものである。

ベトナムは、27.3キログラムとなった。従来、同国では牛乳や乳製品の消費量は少なかったが、経済成長と政府の酪農振興策を背景に、近年、徐々に市民に受け入れられ、市場は拡大傾向にある。

表3 牛乳・乳製品の需給動向 (2016年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(単位:千トン、kg)	
					1人当たり消費量	
インドネシア	913	2,748	3,601	60	13.9	
マレーシア	37	2,171	1,503	704	47.5	
フィリピン	21	2,320	2,134	207	20.7	
タイ	1,161	1,484	2,298	347	33.3	
ベトナム	795	1,763	2,526	32	27.3	

資料：生産量は各国統計、それ以外は国際連合食糧農業機関の「FAOSTAT」

注：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口は国際通貨基金（IMF）のデータを使用。

(2) 肉牛・牛肉産業

ASEAN諸国の牛肉需要を見ると、食習慣や経済発展の差が大きく、1人当たり消費量は、国ごとに大きな差があるが、各国とも横ばいで推移している。

牛肉消費が伸びない要因は、牛肉が豚肉や鶏肉に比べて高価なことなどが挙げられる。

① 牛の生産動向

2016年の肉用牛飼養頭数を国別にみると、インドネシアでは、生体牛輸入規制の緩和により1600万4000頭（前年比3.8%増）と増加した（図3、表4）。地域別では、首都ジャカルタのあるジャワ島が飼養頭数全体の約4割を占めている。また、豪州などから肥育もと牛を輸入して短期間肥育するフィードロット産業もあるが戸数は少ない。

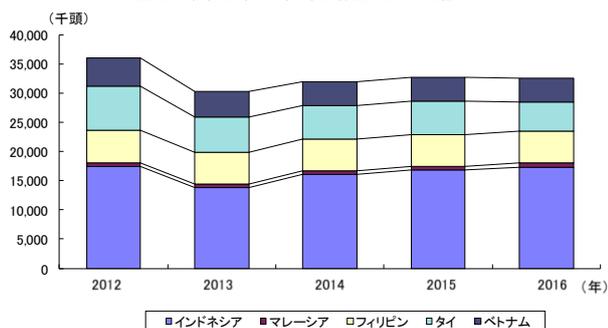
マレーシアでは、62万1000頭（同0.9%減）である。主な品種は在来種とブラーマンなど外国種との交雑種となっている。プランテーションで下草を食べさせる粗放的な一貫経営が多くみられる他、フィードロットなどの集約的な経営を行っているところもある。

フィリピンでは、255万4000頭（同0.8%増）となっている。豪州などから肥育もと牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、飼養頭数20頭未満の小規模経営が全体の9割以上を占めている。飼養頭数の多い水牛は、農作業の耕作や物資の移送のために役用として飼養されている。

タイでは、政府の肉牛振興政策などにより2001年以降微増傾向で推移しており、496万4000頭（同1.2%増）となった。

ベトナムでは、160万4000頭（同2.3%増）となった。生体牛をタイ、ラオス、カンボジアなどの近隣諸国や豪州から輸入して肥育を行う経営が一般的である。フィリピンと同様に水牛は、役用として飼養されている。

図3 肉用牛・水牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

表4 肉用牛・水牛飼養頭数と牛肉生産量 (2016年)
(単位：千頭、千トン)

	飼養頭数		牛肉生産量 (水牛を含む)	前年比 (増減率)
	肉用牛	水牛		
インドネシア	16,004	1,355	550	1.5%
マレーシア	621	60	55	▲ 4.4%
フィリピン	2,554	2,877	415	1.5%
タイ	4,964	-	170	▲ 13.0%
ベトナム	1,604	2,519	395	2.6%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの肉牛の飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

② 牛肉の需給動向

2016年の5カ国の牛肉生産量（水牛肉を含む）を国別にみると、インドネシアでは55万トン（前年比1.5%増）、マレーシアでは5万5000トン（同4.4%減）、フィリピンでは41万5000トン（同1.5%増）、タイでは17万トン（同13.0%減）、ベトナムでは39万5000トン（同2.6%増）となった（図4、表5）。

2016年の牛肉（水牛肉を含む）の1人当たり年間消費量を国別にみると、インドネシアでは、2.7キログラムとなっている（表5）。牛肉の消費習慣は、民族・宗教によって異なり、消費地域は人口の6割が居住し、所得水準が高いジャカルタがあるジャワ島に集中している。

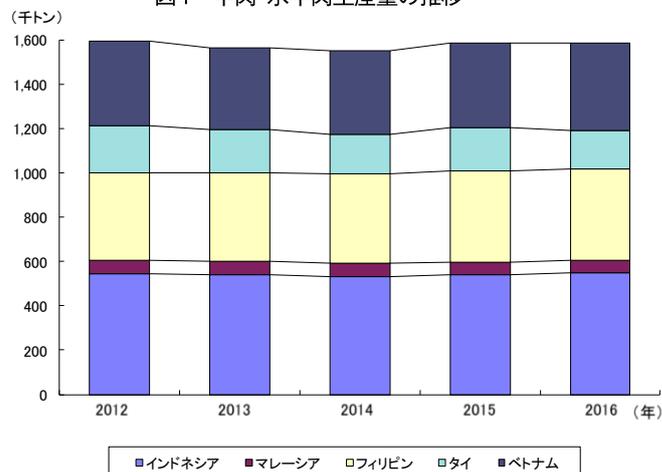
マレーシアでは、7.8キログラムとなった。輸入量は、消費量とほぼ同じ割合で増加しており、消費の伸びを支えている。牛肉自給率は2割程度で、輸入牛肉の割合が大きくなっている。主な輸入先国はインド、豪州である。

フィリピンでは、5.5キログラムであった。牛肉自給率は7割程度であり、主な輸入先国は、インド、ブラジル、豪州である。このうち、インドからの安価な水牛肉は、コンビーフに加工されるなどして食されている。

タイでは、2.1キログラムとなった。輸入量は、1万5000トンと5カ国中で最も少ない。

ベトナムでは、12.1キログラムであった。牛肉自給率は4割弱であり、主な輸入先国は、豪州、ニュージーランド、インド、米国である。

図4 牛肉・水牛肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表5 牛肉の需給動向 (2016年)

(単位：千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	550	149	699	0	2.7
マレーシア	55	200	247	8	7.8
フィリピン	415	153	567	1	5.5
タイ	170	15	148	37	2.1
ベトナム	395	734	1,124	5	12.1

資料：生産量は各国統計、それ以外は国際連合食糧農業機関の「FAOSTAT」

注1：水牛肉を含む。

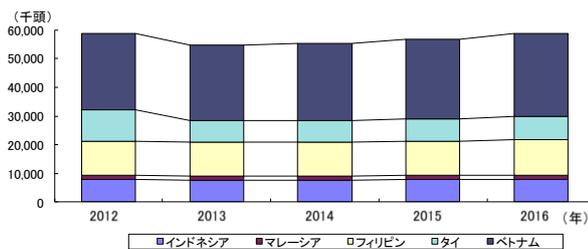
2：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口は国際通貨基金（IMF）のデータを使用。

3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

(3) 養豚・豚肉産業

ASEAN諸国は、インドネシア、マレーシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を食さないイスラム教徒の人口も多く、国によって豚肉の消費量には大きな差があり、豚肉の政策上の位置付けもさまざまである。他方、イスラム教徒が多数を占める国でも、中国系住民などの豚肉需要はあり、飼養規模、地域など限定的ではあるものの、養豚業は存在している（図5）。

図5 豚飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

① 豚の生産動向

ASEAN諸国は、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）などの疾病が継続的に発生しているため、飼養衛生対策が課題である。

2016年の豚飼養頭数を国別にみると、インドネシアおよびマレーシアでは、イスラム教徒の人口が多いこともあり、それぞれ790万3000頭（同1.2%増）、137万1000頭（同3.0%減）となっている（図5、表6）。両国の飼養頭数の差は、非イスラム教徒がインドネシアでは約3800万人であるのに対し、マレーシアでは約1200万人と、非イスラムの消費者人口によるものである。

フィリピンは宗教的な制約が少ないことから、5カ国の中でベトナムに次いで飼養頭数が多い。近年は、2009年をピークに減少傾向で推移していたが、2016年は1247万9000頭（同4.0%増）と2年連続の増加となった。

タイでは、価格変動や疾病などの影響により増減を繰り返しており、2016年は807万2000頭（同5.2%増）となった。

ベトナムでは、国内の豚肉需要の拡大を受けて2000～2005年にかけて増加し、その後は、疾病の発生や飼料価格の高騰、出荷価格の低迷などがあり、おおむね横ばいで推移した。直近では、2014年以降、緩やかな増加傾向にあり、2016年は過去最高となる2907万5000頭（同4.8%増）となった。

表6 豚飼養頭数と豚肉生産量（2016年）

（単位：千頭、千トン）

国名	飼養頭数	生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	7,903	340	2.8%
マレーシア	1,371	195	▲ 12.3%
フィリピン	12,479	2,232	5.3%
タイ	8,072	1,091	6.5%
ベトナム	29,075	3,665	5.0%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

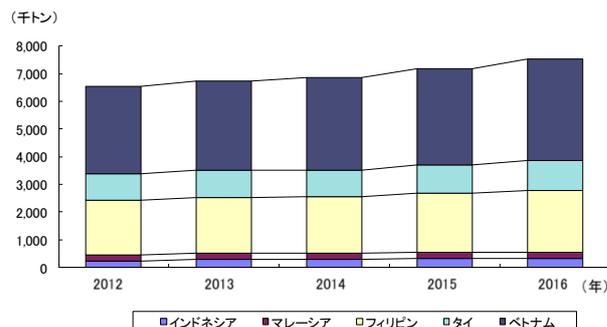
② 豚肉の需給動向

5カ国の豚肉生産量は、全体的に増加傾向で推移しており、2016年は、インドネシアが34万トン（同2.8%増）、マレーシアは19万5000トン（同12.3%減）、フィリピンは223万2000トン（同5.3%増）、タイは109万1000トン（同6.5%増）、ベトナムは366万5000トン（同5.0%増）となった（図6、表7）。

ASEAN諸国の豚肉消費は、宗教の影響を強く受けており、2016年の1人当たり豚肉消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアで1.3キログラムであったのに対し、食肉に関する宗教的制約の少ないベトナムで39.9キログラム、フィリピンで22.6キログラム、タイで15.6キログラムとなっており、国による差が大きくなっている（表7）。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉を好む中国系住民（非イスラム教徒）などが人口の4割程度を占めていることから、国全体では6.9キログラムであるが、マレーシア農業・農業関連産業省獣医サービス局の資料によると、非イスラム教徒に限ると同18.7キログラムとなっている。

図6 豚肉の生産量の推移



資料：各国政府統計

表7 豚肉の需給動向 (2016年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(単位:千トン,kg)
					1人当たり消費量
インドネシア	340	7	346	0	1.3
マレーシア	195	28	218	5	6.9
フィリピン	2,232	109	2,338	3	22.6
タイ	1,091	2	1,078	15	15.6
ベトナム	3,665	45	3,696	14	39.9

資料：生産量は各国統計、それ以外は国際連合食糧農業機関の「FAOSTAT」

注1：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口は国際通貨基金（IMF）のデータを使用。

2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

(4) 養鶏・鶏肉産業

① 鶏の生産動向

ASEAN諸国では、肉用鶏や採卵鶏の飼養が盛んであり、在来鶏やブロイラーの他、アヒルなどの家きんも飼養されている。

インドネシアの2016年の肉用鶏の生産羽数は19億2673万羽（前年比6.2%増）となっており、このうち8割がブロイラーとなる。ブロイラーの生産は、ジャワ地域で盛んで、西ジャワ州、東ジャワ州、中部ジャワ州で全国の生産羽数の6割以上を占めている。また、配合飼料工場と種鶏場もジャワ地域に集中している。毎年鳥インフルエンザの発生はあるものの、人口増加と可処分所得の向上などにより鶏肉需要は増加しており、同年の鶏肉生産量は219万1000トン（同13.6%増）となった（図7、表8）。飼料生産を出自とする外資系企業の参入により、インテグレーションも進展してきている。

同年の採卵鶏の羽数は、1億6135万羽（同4.1%増）、鶏卵生産量は148万6000トン（同8.2%増）となった。

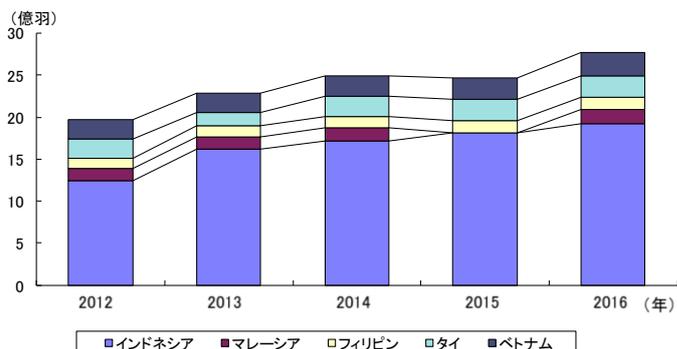
マレーシアの肉用鶏の飼養羽数は、2005年の鳥インフルエンザの発生により減少がみられたものの、徐々に回復し、2016年には1億6459万羽（15年は未公表）、鶏肉生産量は175万5000トン（同7.5%増）となった。2016年の採卵鶏の飼養羽数は、5469万羽（15年は未公表）、鶏卵生産量は、84万3000トン（同5.9%増）となった。

フィリピンの2016年の肉用鶏の飼養羽数は、1億4657万羽（同0.9%増）、鶏肉生産量は167万5000トン（同0.8%増）となった。採卵鶏の飼養羽数は3223万羽（同3.1%増）、鶏卵生産量は46万2000トン（同

3.8%増）となった。

タイでは、鳥インフルエンザが発生した2004年以降、EUや日本向けの生鮮鶏肉の輸出が停止していたが、EU向けは2012年7月、日本向けは2013年12月、韓国向けは2016年11月に解禁した。2016年の肉用鶏の飼養羽数は、2億5356万羽（同1.9%増）となった。採卵鶏の飼養羽数は、2016年は5073万羽（同4.5%増）となった。また、同年の生産量は、鶏肉が191万6000トン（同3.7%増）、鶏卵が77万トン（同4.0%増）となった。

図7 肉用鶏の飼養羽数の推移



資料：各国政府統計

注：2015年のマレーシアの数値は未公表。

表8 鶏の飼養羽数と鶏肉・鶏卵の生産量 (2016年)

国名	飼養羽数		生産量 (単位:千羽,千トン)			
	肉用鶏	採卵鶏	鶏肉	前年比 (増減率)	鶏卵	前年比 (増減率)
インドネシア	1,926,730	161,350	2,191	13.6%	1,486	8.2%
マレーシア	164,587	54,691	1,755	7.5%	843	5.9%
フィリピン	146,566	32,227	1,675	0.8%	462	3.8%
タイ	253,558	50,725	1,916	3.7%	770	4.0%
ベトナム	277,189	—	962	5.9%	548	6.4%

資料：各国政府統計

注1：タイとベトナムの鶏卵は1個58グラムで換算。

2：インドネシアの肉用鶏は生産羽数の数値。

3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

② 鶏肉の需給動向

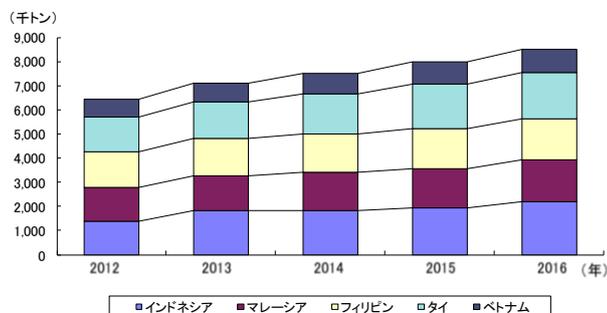
鶏肉は宗教上の制約が少ないことから、ASEAN諸国では最も身近で重要な動物性たんぱく質となっており、経済成長に伴う消費の伸びを受け、生産量は増加傾向で推移している（図8、表9）。需要の増加を背景に、外資による食鳥処理場の整備や大手ファストフードの参入などが増加している。

2016年の各国の1人当たりの鶏肉消費量をみると、マレーシアは、56.2キログラムとなった（表9）。同国は、イスラム教を信仰するマレー系などが人口の過半

を占めていることから、宗教的な制約が少ない鶏肉が多く消費されている。

タイは、14.0キログラムとなった。同国は鶏肉の輸出に注力しており、輸出の伸びを背景に鶏肉生産量も増加傾向にある。

図8 肉用鶏生産量の推移



資料：各国政府統計

表9 肉用鶏の需給の推移 (2016年)

(単位：千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	2,191	4	2,195	0	8.5
マレーシア	1,755	73	1,778	50	56.2
フィリピン	1,675	246	1,915	5	18.6
タイ	1,916	3	964	955	14.0
ベトナム	962	512	1,474	0	15.9

資料：生産量は各国統計、それ以外は国際連合食糧農業機関の「FAOSTAT」

注1：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口は国際通貨基金（IMF）のデータを使用。

2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

③ 鶏卵の需給動向

東南アジア諸国は、鶏卵価格の変動に伴って生産量を調整する需給安定機能が十分に働かないことから、頻りに供給過剰となるという問題を抱えている。

年間1人当たり鶏卵消費量はマレーシア、タイの順に高く、2016年はそれぞれ23.1、11.0キログラムとなり、一方で、最も低いフィリピンは同4.5キログラムと、国によって大きな開きがある（表10）。

表10 鶏卵の需給動向 (2016年)

(千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人1年当たり消費量
インドネシア	1,486	0	1,485	0	5.7
マレーシア	843	0	729	113	23.1
フィリピン	462	0	462	0	4.5
タイ	770	0	759	12	11.0
ベトナム	548	0	546	2	5.9

資料：生産量は各国統計、それ以外は国際連合食糧農業機関の「FAOSTAT」

注1：タイとベトナムの鶏卵は1個58グラムで換算。

2：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口は国際通貨基金（IMF）のデータを使用。

3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。